

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Villages and Dwelling Houses of Hammond Island, Torres Strait

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 尚次 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004590 |

ハモンド島（トレス海峡）の村落と住居

杉 本 尚 次*

Villages and Dwelling Houses of Hammond Island, Torres Strait

Hisatsugu SUGIMOTO

This is a preliminary report on an ethnological and geographical survey conducted in 1975 on Hammond Island, Torres Strait.

The aim of this study was to investigate the fishermen's culture and the societies of the Torres Strait Islands as a transition area lying between the Asian Continent and the Pacific Islands, and to make clear the roles played by these island people in cultural diffusion as well as their processes of acculturation. This report is divided as follows:

- 1) Introduction
- 2) Natural environment and land use on Hammond Island
- 3) The appearance of a village
- 4) Changing house types
- 5) A new catholic village and movement of the population
- 6) Conclusion

- | | |
|------------------|------------|
| I. はじめに | IV. 住居の特色 |
| II. ハモンド島の自然環境概要 | V. 寄合世帯的村落 |
| III. 村落の景観 | VI. おわりに |

I. はじめに

1975年7月～9月の3カ月間、昭和50年度文部省科学研究費補助金による共同調査「トレス海峡島嶼民の地理学的・民族学的研究」第1次調査に参加する機会を得た。

* 国立民族学博物館第4研究部

この調査は、アジア大陸と太平洋諸島の接触地域における島嶼民の伝統的漁労文化・漁民社会の研究を通じて接触地域のもつ文化伝播上の役割を明らかにし、加えて当地域の文化変容の過程を明らかにしようとしている。

第1次調査の隊員は、藪内芳彦（関西大学教授）を隊長に、大島襄二（関西学院大学教授、国立民族学博物館運営協議員）、島田正彦（立命館大学教授）、筆者の4名と、現地参加のラ・トロープ大学（メルボルン）社会人類学講師の北大路弘信からなっている。さらに大阪市立大学大学院学生松本博之、関西学院大学大学院学生瀬川真平が加わった。それから和歌山県立新宮商高の久原脩司教諭が、和歌山県出身出稼ぎ漁民研究のため特別参加した。

第1次調査については、トレス海峡諸島概況、ハモンド島、マビオグ島、ダーンリー島、ヨーク島、メール島について、昭和51年人類学・民族学連合大会で各分担者により報告した。調査記録は「トレス海峡諸島調査記」としてまとめられた[藪内 1977: 70-77; 久原 1977: 74-84; 杉本 1977a: 58-65; 松本 1977b: 58-66; 島田 1977: 43-52; 大島 1977a: 56-62]。各隊員による個別発表も行われつつある[大島 1977b: 101-119; 松本 1977a: 121-143, 1977c: 368-388; 杉本 1977b: 1-19]。

第2次調査は1977年7月～9月を中心に行われた。調査地は、トレス海峡諸島の

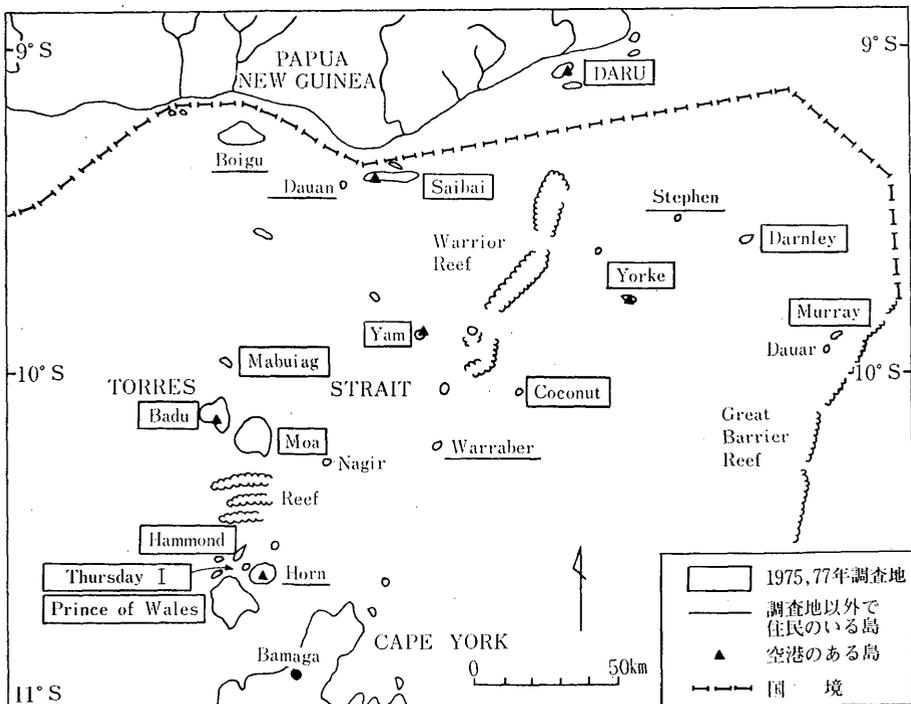


図1 トレス海峡諸島全図

うち、サイバイ島、バドゥ島、モア島、ココナツ島、ヤム島、ヨーク島、メール島、ダーンリー島と、パプア・ニューギニア側のダルー島である。

ここでは第1次調査のハモンド島について報告する。調査島嶼では隊員1～2名ずつに分散して調査したが、ハモンド島は地域中心木曜島にも近く、他島の調査許可に時間がかかった関係もあって、第1次調査隊員全員によって調査が行われた。これら資料を活用しながら、とくに村落と住居ついてまとめようとする。なおトレス海峡諸島全域や隣接地域との比較などは、第2次調査の資料などをも加えて次の機会に報告したい。

トレス海峡は、ニューギニア島とケープヨーク半島（オーストラリア大陸）にはさまれた海峡である。最短部で128 km あるが、大堡礁の北端部や、ウォリアーリーフなど珊瑚礁が無数にあり、その間に島々が散在しており世界屈指の海上交通上の難所となっている。

トレス海峡は、1606年トレスが発見した海峡であるが、1770年クックが測量をともなった探査をしている。その後この海域の探検航海が続く。学術研究としては A. C. Haddon を中心としたケンブリッジ大学トレス海峡調査隊の研究報告をまずあげねばならない [HADDON 1901-1935]。この調査にはリヴァースなど著名な学者が多く参加しており、自然、島民の経済、物質文化、社会生活、民族心理など多岐にわたっている。この調査研究は、ヨーロッパ文化流入前の、かなり伝統的な島民の生活文化の諸相を伝えているので、調査研究の基本的文献となっている。Haddon 隊の調査以来、規模の大きな調査は、キャンベラのオーストラリア国立大学太平洋地域研究所が行った一連のトレス海峡地域に関する研究がある。D. Walker ら編集のオーストラリア大陸とニューギニア島間の自然的、人文的諸関係を論じたもの [WALKER 1972] や、H. Duncan ほかに数名によるトレス海峡諸島民研究をあげることができる [DUNCAN 1974]。前者の中には J. R. Beckett のトレス海峡諸島民研究が含まれている [BECKETT 1963]。後者はトレス海峡諸島の社会や経済、人口、国境問題等々現状分析が中心となっている。その他 W. Laade の北部トレス海峡諸島（サイバイ島など）をフィールドとした詳細な研究 [LAADE 1971]、B. Nietschmann の西部トレス海峡諸島を中心とした報告がある [NIETSCHMANN 1977: 1-17]。M. Lawrie のトレス海峡諸島の神話と伝説集 [LAWRIE 1970] も興味をひく。

従来オーストラリア原住民やニューギニア山地民の研究は比較的多くみられるが、概して島嶼や海岸部の研究が少ないようである。

Ⅱ．ハモンド島の自然環境概要

トレス海峡諸島は、一般に東部、中部、西部諸島に区分されている。ハモンド島は

西部諸島に属している。

西部諸島は、パプア・ニューギニアに近いサイバイ島、ボイグ島、ダウアン島。海峡のほぼ中央部南緯10度付近のマビオグ島、バドゥ島、モア島。三つの大珊瑚礁をはさんで南側にはハモンド島、木曜島、プリンスオブウェールズ島、ホーン島などが比較的近接して位置している。

西部諸島は石英斑岩、花崗岩など古い火成岩で構成されるものが多く、ハモンド島や木曜島も基盤は火成岩である。

ハモンド島は全般的に低山性の島だが、中央やや北寄りが 130 m 前後と高く、島の南側は 60 m 余で花崗岩の露出するところもある。この両地区が植生が密になっているが、他はユーカリ樹の疎林で、パンダナスの点綴する草原状のところもある。一種のサバナ的景観をなしている。全般に赤味があったラテライト土で、セピア色の奇異な姿の蟻塚が散在している。村落は島の東南部に位置している。狭小な砂浜海岸部と、やや内陸部に家屋が集まっている。約 15 m の小丘上に石積みのカトリック教会

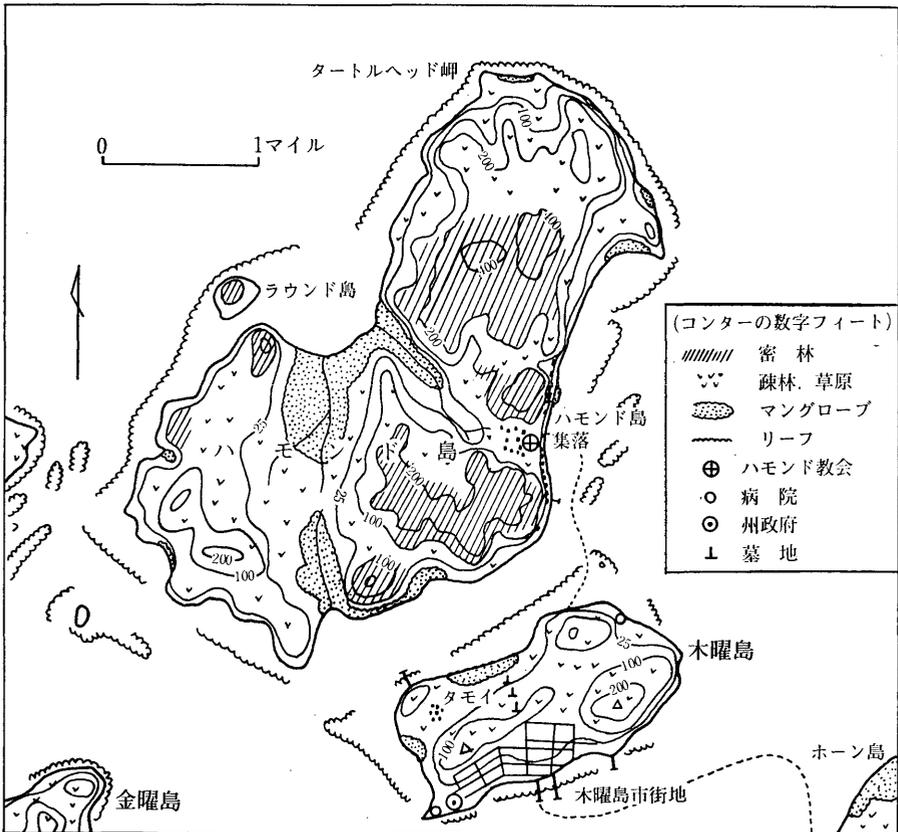


図2 ハモンド島現況図

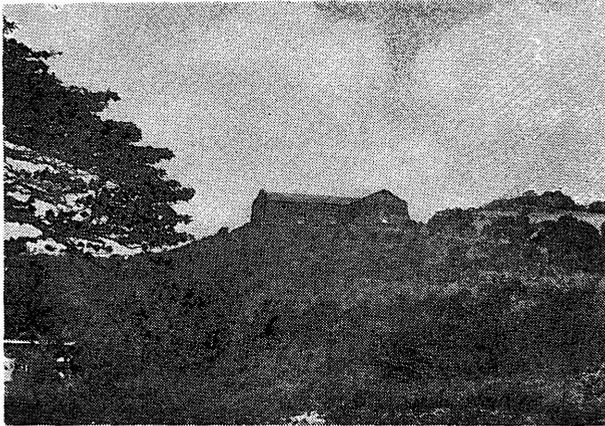


写真1 小丘上に立地する教会

が建ち、景観上目立っている。トレス海峡の島々からカトリック教徒を集めて新しく村づくりをしたのである(後述)。

教会の位置する小丘背後の村落の立地しているところは平坦な盆地状の地形だが、潤川（調査時は乾季）が侵蝕蛇行しながら北流している。丘陵性山地を越えた島の南西部にも平坦地があり、塩分を含んでいる。ここからも河川が北流している。下流部はいずれもマングローブ林で、かなり内陸部まで広がっている。このような状況からみて、古くは北側からの入江が深く入りこんでいたと考えられる。

山地には野生化した牛や豚が相当数生棲しているといわれる。ハモンド島の付属島ラウンド島は低平な島で、州政府の許可をうけた島民によってバナナ・ココヤシ・ヤムイモなどが栽培されている。

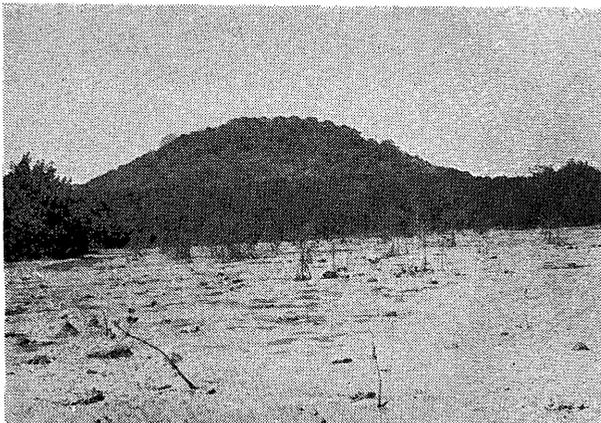


写真2 干潮時のマングローブ林

島の周囲は珊瑚礁がとりまいており、潮流が速く、島間の距離は短くても船は大きく迂回し難航している。

隣接する木曜島の測候所資料によって気候の特色をみると、4月～10月（とくに7～9月）は南東貿易風が強く、乾季にあたっている。気温も8月の平均気温 25.7°C（1966）で朝夕は涼しい。11月から3月は北西季節風になり、年間降水量の多くがこの時期に集まる。1月平均気温も 28.8°C と上昇し、高温多湿となる。しかし年降水量は 1700 mm 前後であり、オーストラリア北部のサバナ気候区の外縁部に属している。

Ⅲ. 村落の景観

ハモンド島では、村落地区について、簡易測量による1,000分ノ1地形図を作製した。

海岸のアーモンドの大樹（後述）を基点にして、線引き、歩測、実測を隊員全員で分担し基本図を作った。これに主要樹種から栽培植物など土地利用、家屋型、付属建物などを詳細に記入した [図3-4]。

この地図を中心にして、村落の景観を検討する。

村落は細長く海岸沿いに立地する地区と、やや内陸部の2地区に分けられる。海岸沿いでは北部に小平地があり、北端が村長 J. Sabatino の屋敷地である。高床式の住居と洗濯場、便所、鶏小屋、回転式洗濯干場が各々別棟となっている。道路をはさんで海岸側に船小屋、船置場がある。小川の川口あたりに、土砂の堆積、小砂嘴状の地形が形成されつつある。屋敷内の樹種はアーモンド樹、ココヤシが主で、バナナとマニオクを少し栽培している。小川が境界となり、T. Sabatino と J. Ahwang の屋敷地となる。小川沿いに少し平地があるが南側は山地が海岸まで達している。ココヤシがかなり計画的に植えられ、バナナ、マンゴー、山麓部にはパンダナスがみられる。ここから南へ山地が迫っていて村落をみないが、約 200 m 距てて狭小な平地があり、民家2戸と墓地がある。

木曜島との間に運行されている通学船などの発着地点には、片流れ屋根の小屋とアーモンドの大樹があり、測量の基点にした。

「この島はアイランダーズのためのリザーブランドである。許可なく入島した者は500ドルの罰金……」と記した立札が目をはひく。ここから南側の山麓海岸部には8戸の民家が立地している。それぞれ小川、ココヤシ、アーモンド樹、敷石、トタン囲い、樹木と樹木の見通し線などで屋敷の境界としている。

海岸には小型の発動機船（ディンギ）などが置かれている。古びたカヌーもみられるが、今は全く使用していない。6～9月は南東の貿易風が強烈で飛砂もある。

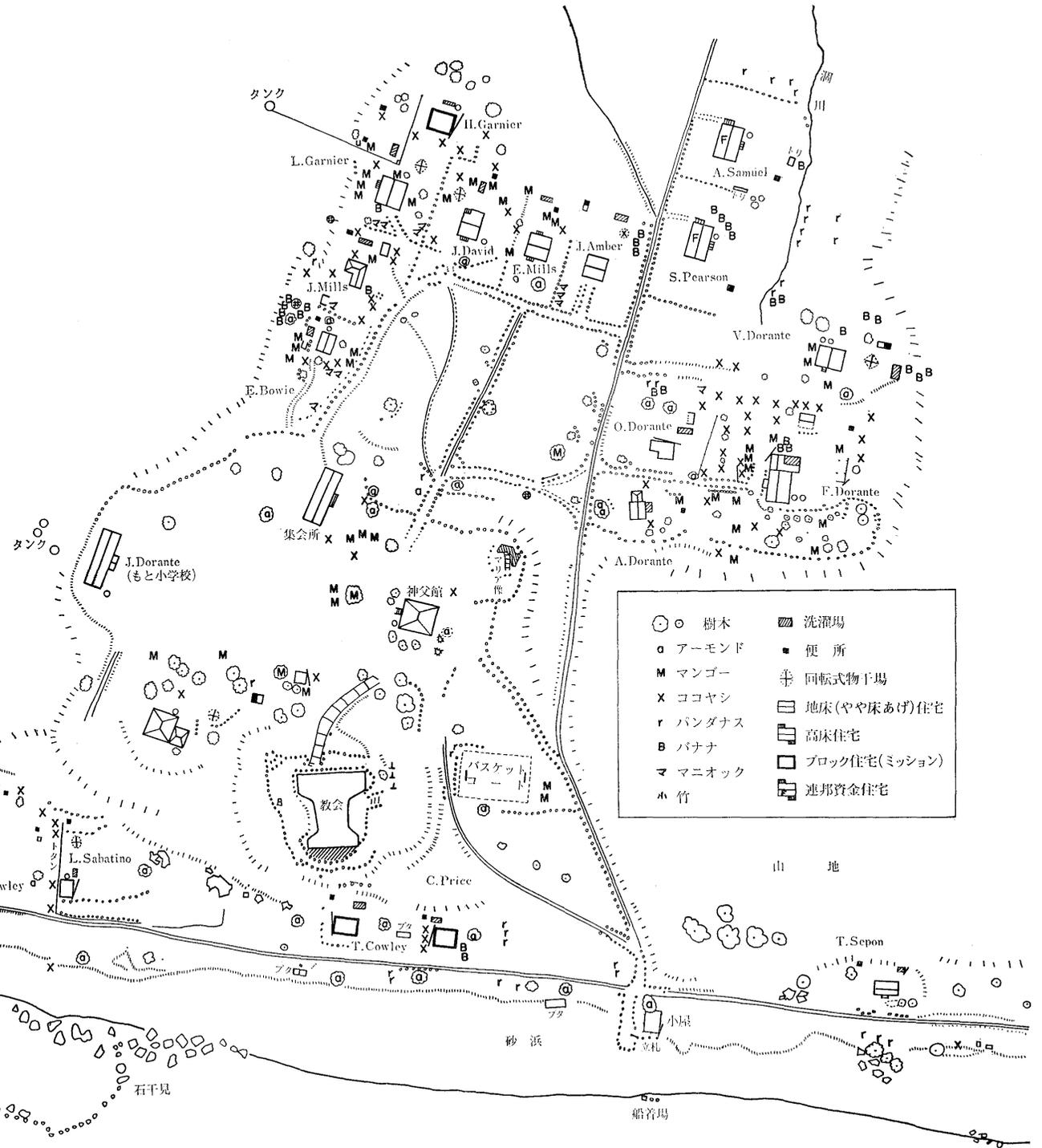
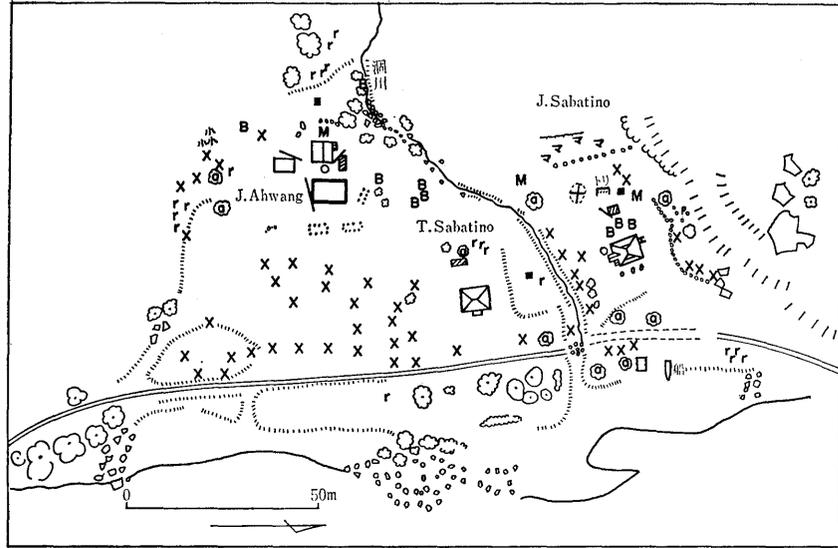


図3 (左上図) ハモンド島村落北部 (凡例図4参照)

図4 ハモンド島村落主要部

〔地図の作製は調査隊全員による〕

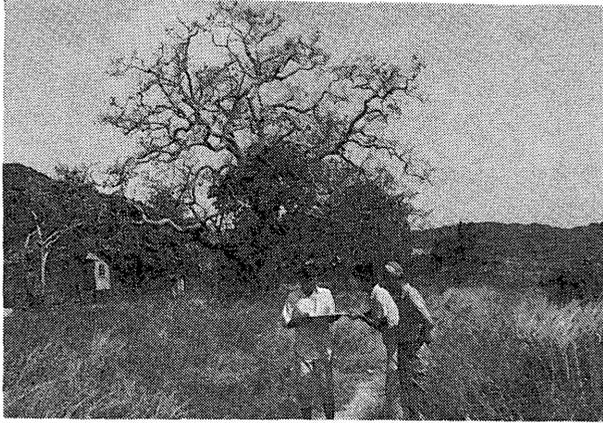


写真3 内陸側の村落（地図作製風景）

干潮時には珊瑚礁が姿をあらわす。石を大きく半円状に積んだ石干見が W. Cowley 屋敷の地先に一カ所ある。彼は石干見の多く残っているダーンリー島から移住してきた。南東貿易風の卓越する時期は風波高く、石干見での漁期は凧になる北西風の冬季が最適で、低潮時にナイフや銚などで獲る。

教会のある小丘には神父館、集会所、旧小学校舎、バスケットコートなどがあり、美しく整備されている。カトリック教会を中軸に新しく村づくりをした島であるから、この地区が村落生活の中心となっている。

教会のある小丘の内側に山地に囲まれてややまとまった平坦地があり、13戸の民家が立地している。前記の上陸地点（船着場）から道路がのびている。この平坦地は涸川（乾季）が北流している。各屋敷はこの平坦地周囲をとりまくように立地している。小石を整然と並べて屋敷境としたものが多く、樹木列や見通し線などもある。各屋敷

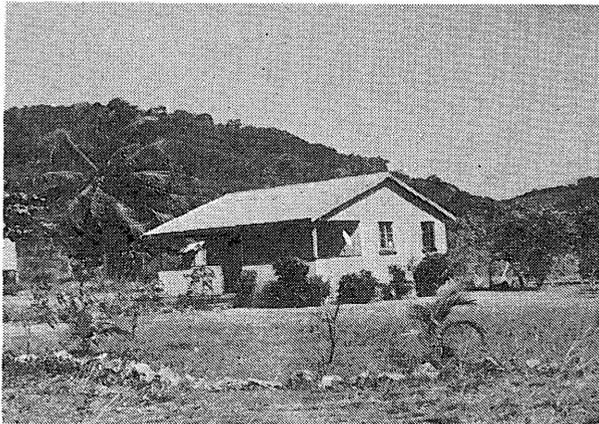


写真4 屋敷境界の石（J. Amber の家）

地には主屋と洗濯場、便所、天水タンクがセットになっている例が多く、風車で揚水したり、山の中腹にタンクを置き数戸で利用するものもある。井戸をもつ家も3例ある。屋敷内の樹種はココヤシ、アーモンド、マンゴーが主で、バナナと僅かながらマニオクを栽培している。

平坦地中央部は空地で植生も乏しい。古くは塩分を含んだ凹地だったようで、類似の地形は島の南西部にもひろがっている。屋敷地はこれを避けたのであろう。内陸部の村落位置は南東貿易風をある程度遮断することも立地条件として見逃せないであろう。

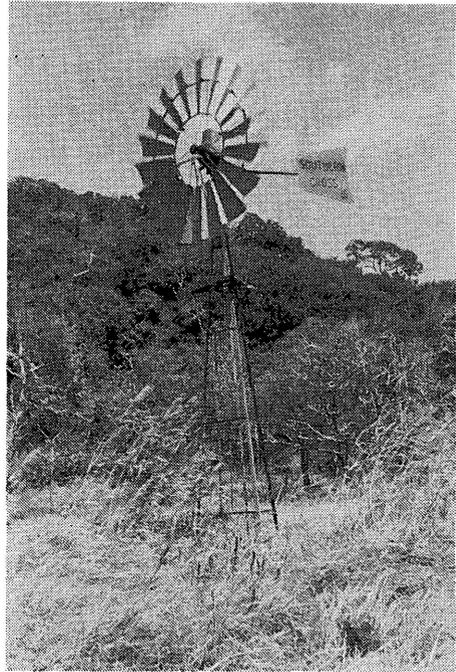


写真5 揚水用風車

Ⅳ. 住居の特色

19世紀に行われた A. C. Haddon らの調査では、マビオグ島とメール島などの伝統的住居の報告があるが、Haddon 隊調査当時の新しい住居は、各種のポリネシア、メラネシアからの外来者によってもたらされたモデルに基づいて造られ、多くの点で伝統的な古いタイプとは異なっていると、新しい様式の増加を指摘している [HADDON 1901-1935]。Haddon の調査から80年近くを経た今日、トレス海峡諸島の住居はさらに大きく変化している。

近年トレス海峡諸島に対しては、連邦政府、クインズランド州政府の手厚い援助があり、連邦および州政府資金による住宅の建設やミッションによる住宅の建設が進んでいる。

ハモンド島でも30戸の住宅のうち連邦政府資金によるアルミプレハブ高床式住宅が4戸、ミッションの資金によるブロック積みの住宅4戸があり、他は個人資金による住宅21、旧校舎利用1となっている。ココヤシの葉などを材料とした伝統的民家はこの島ではみられない(表1)。

オーストラリア国立大学の Duncan は、バドゥ、サイバイ、メール、ヨーク4島の住宅を調査しているが [DUNCAN 1974]、資金別にみると、連邦および州政府による住宅がヨーク島で76%、バドゥ島54%、サイバイ島35%、メール島44%を占めている。壁材料別では、アルミニウムプレハブ、トタン、石綿などが大半を占めている。



写真6 アルミニウムプレハブ、高床式の連邦資金住宅

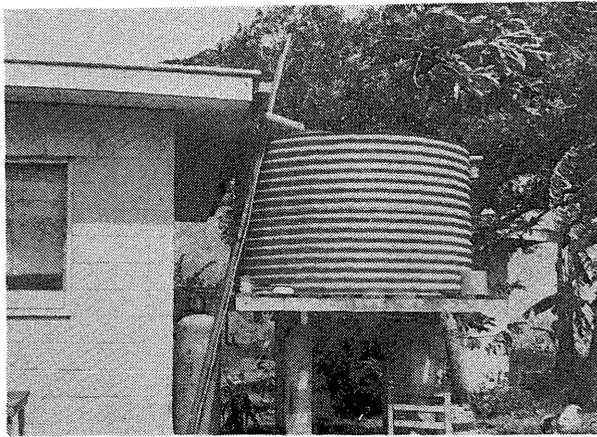


写真7 ミッション資金によるブロック住宅と天水タンク

ココヤシの葉などを用いた伝統的民家はメール島で38%あったが、最近伝統的材料は急速に減少している。第2次調査の報告によると、ココナツ島のように島によっては伝統的材料を使った住宅が残っているところもある。これは交通上の問題や、島嶼による住宅資金援助の差異などが関連しているようである。

ハモンド島の個人資金による住宅のうち47%が北クインズランド型ともよばれる高床式の洋風熱帯住宅で、他の島でもこの型が多い。

コンクリートで基礎をつくり、50 cm 前後床をあげた型は53%あり、4～5段の小梯子を使っている家もある。ハモンド島は、トレス海峡諸島各地から集まって新しく集落を形成しているので、かつてトレス海峡諸島にみられた地床式（土間式）住居の様式を持ち込んだその残像形態とも考えられる。しかし他島との比較など資料の集積

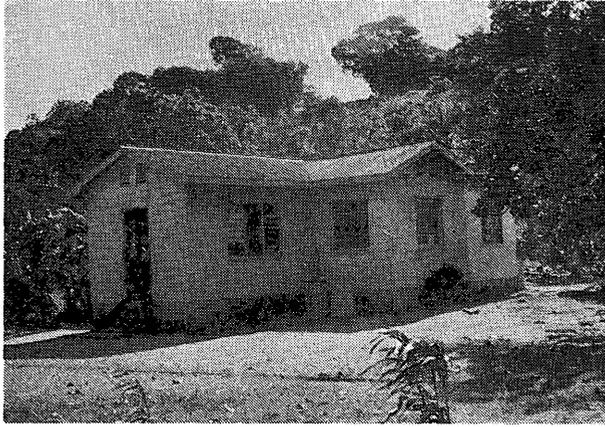


写真8 少し床をあげた住居

が必要であろう。

近隣の木曜島は高床式の洋風熱帯住宅が多い。木曜島はトレス海峡諸島の地域中心であるが、トレス海峡諸島の中では歴史も浅く、1877年以降植民地拠点となってから本格的な居住が始まっている。したがって当初からトレス海峡諸島民の伝統的住居とは別系統の、白人による北クインズランド型洋風熱帯住宅が建てられたのである。この木曜島の家屋型が新しい家屋型としてトレス海峡の島々に影響を与え、伝統的民家にとって代ったように思われる。

住宅の屋根材料はほとんどトタンである。形態は波状トタン (Corugated Iron), 小波状トタン (Ripple Iron), 薄鉄板 (Sheet Iron) など種々のものが混じっている。スレート (石綿板) などもみられる。

家屋型としては壁面の材料が指標としてよく用いられている。ハモンド島の家屋壁面の材料は、繊維質板 (石綿など) 46%, アルミニウムプレハブ17%, トタン20%, ブロック17%となっている。木曜島市街地では繊維質板 (石綿など) 48%, 木材30%, アルミニウムプレハブ10%, トタン10%, ブロック2%で、戦前型といわれる木材 (下見板など) がかなり残っている。トレス海峡諸島の人々を集めて新しく作られた木曜島のタモイは、繊維質板 (石綿など) 70%, アルミニウムプレハブ22%, トタン7%で、全く新建材中心である。

北クインズランド型はオーストラリアにおける洋風熱帯住宅で、高床が特色である。この高床は、1 m 前後 (Low Block) と、1 m 以上 (2 m 前後のもの) (High Block) に区分される。ハモンド島では個人資金住宅でも大半が High Block である。連邦資金住宅は杭が鉄パイプで 2 m の高床 (High Block) となっている。High Block の家では床下に洗濯場、干場を設けたものがあり、物置として利用する例もある。古い家屋は高床の杭も木材 (角材、古くは自然木) だが、白蟻の害があり、コンクリートや

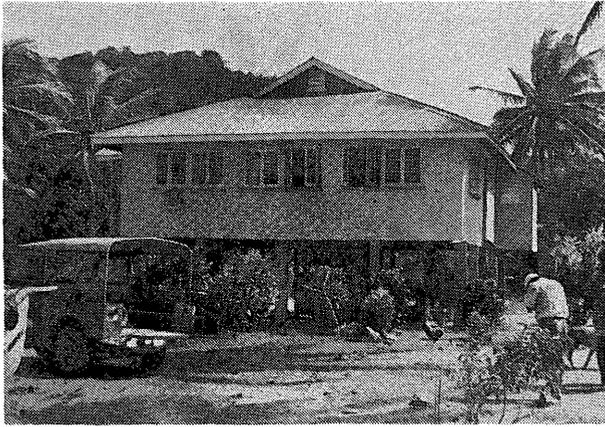


写真9 個人資金による高床式住居（村長 J. Sabatino の家）

鉄パイプが増加している。

北部クインズランドは熱帯地域であり、雨除け、日除けや室内気温の調節上広いベランダをもつ住宅が多い。北部クインズランドのサンプル調査では62%が3面にベランダをもっている [SUMNER 1974: 17-24]。

1920年代初期の北部クインズランドの標準的家屋型は、トタンぶきのピラミッド型（寄棟）屋根、高床で3面にベランダがあり、寝室2～3、居間、食堂をもち、炊事場は分離しているか、主屋の背後に設けるものであった [SUMNER 1974: 17-24]。木曜島にも標準型がみられるが、木曜島ではかなり経済的に上層の住宅に多く、現在では古い型となっている [杉本 1977b: 1-19]。ハモンド島では、標準型のベランダ部分を寝室、居間など居住空間とした型が多くみられる。

炊事場は、多くの家は主屋にとりこんでいるが、概して背後のベランダ部分、下屋部分に配置している。古い型といわれる炊事場を別棟にした型はハモンド島にはみられない。

最も単純な型は寝室と居間が中心部を占め、炊事場、食堂とベランダがつく型で、家族数の増加にともなってベランダ部分を居室とし、さらにベランダを後補して拡張しているようである。

現在のハモンド島の民家は、最近の連邦や州政府の住宅政策によって画一的な型がかなり普及している。個人資金住宅の場合はベランダの装飾、窓型、壁面のペンキの色彩などは経済的な面や居住者の嗜好によって多様である。

主屋以外に洗濯場、便所、天水タンクがセットになっている例が多い。洗濯場は片流れのトタン屋根、コンクリート床と貯水槽があり、連邦資金住宅など高床式 (High Block) の家では床下に洗濯場を設けている (6例)。便所は1m四方の箱型のもので、内部は木製腰掛式で、一種の洋風トイレである。回転式の洗濯物干しを持つ家も

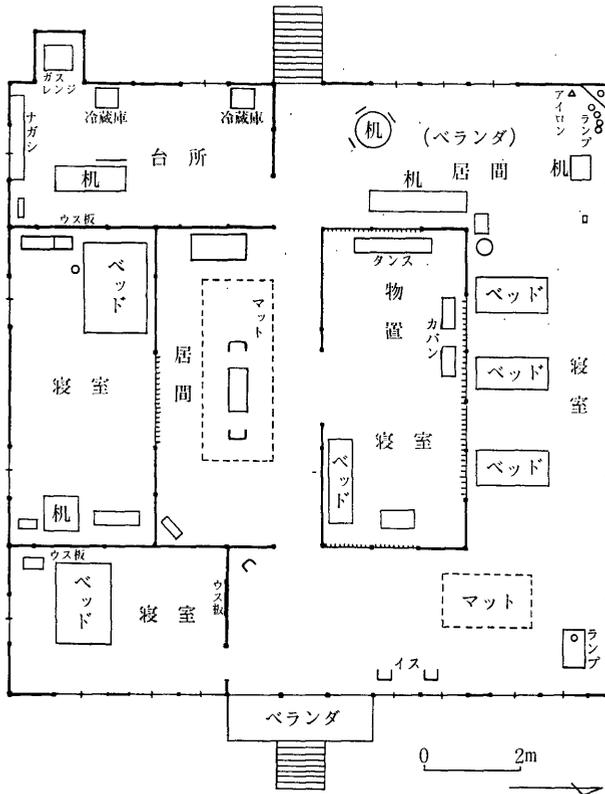


図5 個人資金住宅間取り (F. Sabatino の家)

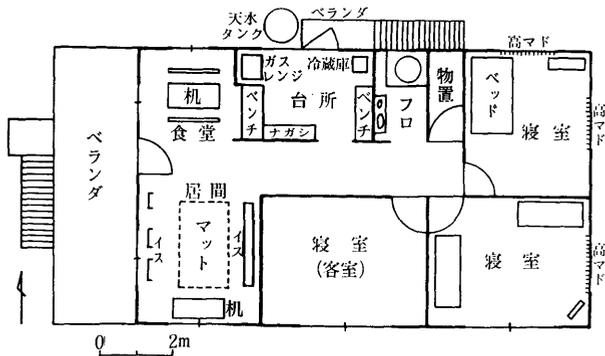


図6 連邦政府資金住宅間取り (S. Pearson の家)



写真10 連邦資金住宅の内部
居間でワループ（ニューギニア製ドラム）を囲んでの調査

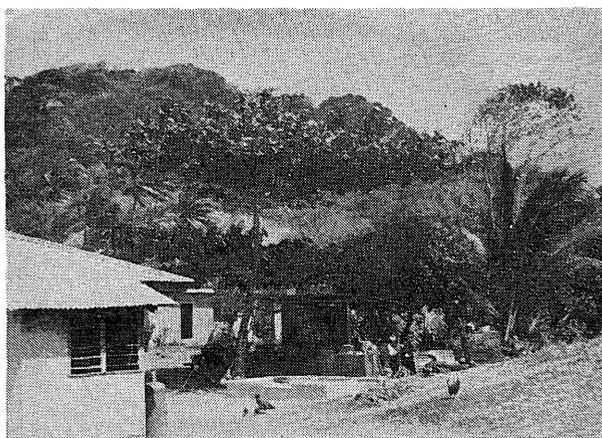


写真11 主屋（左）と洗濯場

6例ある。生産関係では小規模な鶏小屋をもつ家3例、豚小屋4例、船小屋1例と少ない。

各家の屋内は美しく整頓されていて、床にパンダナス製のマットなどを敷いている。机、椅子など家具類、冷蔵庫（ガス）、ガスレンジなどは大部分の家が所持している。F. Dorante 家の場合、洗濯機が1961年から、ガスレンジ1968年、冷蔵庫1974年の他、レコードプレイヤー、テープレコーダを持っている。ポラロイドカメラを持つ家もある。

各家庭で差異はあるが、最近のオーストラリア連邦政府やクインズランド州政府による手厚い社会保障が日常生活面にもおよんでいるのである。この背景には、パプア・ニューギニアとの国境問題が絡んでいることも充分考えられることであろう。

V. 寄合世帯的村落

Haddon らの報告によると、ハモンド島をはじめその付近の島々は無人島が多かったという。ハモンド島の村落形成の歴史は比較的新しいことになる。

ハモンド島に住む F. Dorante 夫妻によると、1920年代に先住者がいたが、悪事を重ねたとの理由で政府が追放し、そのあとカトリック教会によって管理させたといわれている。

そして1928年カトリック教会が開かれたが、この時期にハモンド島に来住したのは、Kanak 家、Sabatino 家、Sebasio 家で いずれもダーンリー島やその付近のネピアン島から移住してきた。その後、バドゥ、ヤム、ココナツ、マビオグ、メール（マレイ群島）などトレス海峡の島々からカトリック教徒が、あるいはカトリックに改宗した人々が来住し、村落を形成したのである（表1）。

比較的居住の歴史の古い他の島々に比べて寄合世帯的な特異な性格をもった村落なのである。

人種的には、トレス海峡の島々全域がメラネシア人種に属しているが、著しく混血が進んでいる。ハモンド島は、そのようなトレス海峡各島嶼から移住してきたため、形質的にも毛髪は縮毛から直毛に近い形状まで各種あり、皮膚も暗黒色から褐色とバラエティに富んでいる。

ここでは家族調査の中から数例をとりあげて検討する。ハモンド島は29家族（1975年8月）だが、Sabatino 家と Dorante 家の2家系につながるものが15あり、両家の間に通婚もある。

Sabatino 家の場合、F. Sabatino の父 Nicholas (1860-1948) は、フィリピンのパナイ島イロイロ出身で、ダイバーとしてトレス海峡ダーンリー島に来住し、島の女性と結婚、1948年ハモンド島に移住した。F. Sabatino の妻 Marcella は、Kanak 家の出身だが、彼女の父 Joseph Kanak はフィリピン人、母はダーンリー島民である。F. Sabatino 夫妻の間には18人の子供があり、このうちハモンド島在住者は4人である。[長男が F. Dorante の長女と結婚し、三男は A. Dorante の三女と結婚している。次女は V. Bobongi と結婚したが死亡し、4人の子供は F. Dorante 夫妻と住んでいる。三女は E. Mills の三男と結婚しているが、現在ウィーパへ出稼ぎ中である。] 島外へ流出したものは多く、タウンズビル1、ウィーパ4、マカイ2、木曜島3（不明2、死亡2）となっている。

Dorante 家の場合、F. Dorante の父はフィリピンのサマル島からダイバーとしてダーンリー島に来住、母はメール島の出身でニューカレドニア島民の血も混じっているという。夫妻は F. Dorante ら7人の子供と近くのネピアン島に移った。F.

表1 ハモンド島の家族と人口

| | 家族(戸主名) | 人 口* | | | 住 居 | 戸主移住前住地 |
|----|------------------|--------------------------|-------------------------|----------------------------|----------------------------|---------------|
| | | 男 | 女 | 計 | | |
| 1 | Joseph Sabatino | 3 (2) ×1 | 10 (7) ×1・2 | 13 (9) | 個 人 | ⊕ |
| 2 | Thomas Sabatino | 6 (4) ・2 | 4 (4) | 10 (8) | 〃 | ⊕ |
| 3 | Jackson Ahwang | 3 (1) ×1・1 | 2 (2) | 5 (3) | ミッション | ←Badu |
| 4 | 空 屋 | | | | 個 人 | |
| 5 | Ordrick Mosby | 2 (2) | 3 (3) | 5 (5) | 連 邦 | ←Yam |
| 6 | Taum Sepon | | 1 (1) | 1 (1) | 個 人 | ←Badu |
| 7 | Antony Dorante | 4 (3) ×1(Ad2) | 4 (4) | 8 (7) | 〃 | ←Darnley |
| 8 | Owen Dorante | 5 (5) | 5 (5) | 10(10) | 〃 | ⊕ |
| 9 | Francis Dorante | 5 (4) ×1 | 4 (3) ・1 | 9 (7) | 〃 | ←Darnley |
| 10 | Vincent Dorante | 10 (0) | 8 (0) | 18 (0) | 〃 | →Mackay |
| 11 | Songhie Pearson | 6 (5) ・1 | 1 (1) | 7 (6) | 連 邦 | ←Coconut |
| 12 | Ada Samuel | 1 (1) | 5 (3) ×2 | 6 (4) | 連 邦 | ←Yam |
| 13 | James Amber | 5 (4) ・1 | 2 (1) ×1 | 7 (5) | 個 人 | ←Mabuiag |
| 14 | Edward Mills | 1 (1) | 0 (0) | 1 (1) | 〃 | ←Nagir |
| 15 | Joseph David | 5 (5) (Ad1) | 2 (2) | 7 (7) | 〃 | ←Yam |
| 16 | Hendry Garnier | 5 (5) | 5 (5) | 10(10) | ミッション | ⊕ |
| 17 | Louis Garnier | 1 (1) | 1 (1) | 2 (2) | 個 人 | ←Coconut |
| 18 | John Mills | 1 (0) | 4 (0) | 5 (0) | 〃 | ←Coconut |
| 19 | Elithoa Bowie | 2 (1) ×1(Ad1) | 1 (1) | 3 (2) | 〃 | ←Coconut |
| 20 | John Dorante | 2 (2) | 2 (2) | 4 (4) | 旧学校舎 | ⊕ |
| 21 | Charlie Price | 2 (1) ×1(Ad1) | 3 (3) (Ad2) | 5 (4) | ミッション | |
| 22 | Thomas Cowley | 1 (1) | 5 (5) | 6 (6) | ミッション | ←Badu |
| 23 | Lucio Sabatino | 3 (2) ×1 | 3 (3) | 6 (5) | 個 人 | ⊕ |
| 24 | Wannie Cowley | 2 (1) ×1(Ad1) | 0 (0) | 2 (1) | 〃 | ←Badu←Darnley |
| 25 | Hislo Sabatino | 4 (3) ×1 | 3 (3) | 7 (6) | 連 邦 | ←Yam←Darnley |
| 26 | Victor Bobongi | 1 (0) ×1 | 0 (0) | 1 (0) | 個 人 | →Weipa |
| 27 | Francis Sabatino | 3 (2) ×1 | 3 (3) | 6 (5) | 〃 | ←Darnley |
| 28 | George Robinson | 1 (1) | 1 (1) | 2 (2) | 〃 | ←Cairns |
| 29 | 25の所有 | | | | 〃 | |
| 30 | Tonny Sabatino | 2 (2) | 3 (3) | 5 (5) | 〃 | ⊕ |
| | 計 | 86(59) ・5 ×10(Ad6) | 85(66) ・3 ×4(Ad2) | 171(125) ・8 ×14(Ad8) | 個 人 21 ミッション 4 連 邦 4 | |

* 人口〔登録人口〕 ・ 本土の学校 ⊕ ハモンド島生れ
 () 内は現住人口 × 本土その他の職場 ← 前住地
 1975・8 Ad 養子 → 出稼ぎ

Dorante らの世代になってハモンド島に移っている(戦前)。F. Dorante の妻はダーンリー島生れで、父はイギリス人(スコットランド)である。子供は11人あり、ハモンド島在住は4人(1人はマカイ出稼ぎ中)。島外ではウィーパ3, アリスプリングス1, ケアンズ1, 木曜島2となっている。F. Dorante の兄 A. Dorante も近くに住み、妹 Camilla は、F. Sabatino の弟と結婚している。

L. Garnier の場合、ココナツ島生れで父はフランス人、母はワラビル島民、妻はヤム島民で、1950年ハモンド島に来住している。

O. Mosby はヤム島生れで、父はヨーク島、母はヤム島出身、祖父はヨーク島に来住したアメリカ人である。

J. Ahwang はバドゥ島。妻はダーンリー島のセバシオ家の出身、彼女の父はポリネシアのロトウマ島からダーンリー島に来住している。Ahwang 家はシンガポールか

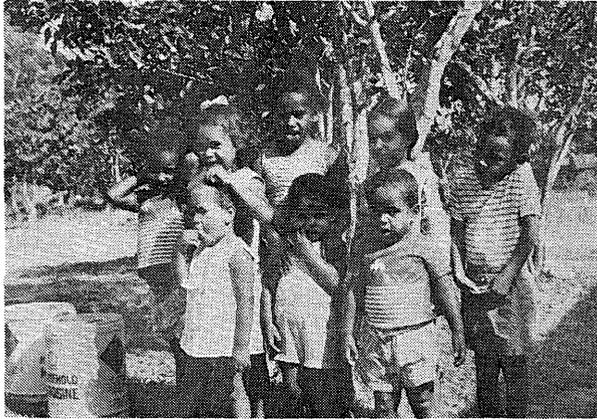


写真12 島の子供たち



写真13 神父館前に集まった村人たち

杉本 ハモンド島（トレス海峡）の村落と住居

らトレス海峡へ来たといわれている。

S. Pearson はココナツ島出身で、祖父はイギリス人である。J. Amber はマビオグ島から、1945年来島している。

E. Mills はナギール島から1951年ハモンド島へ来たが、父はサモアから来住したらしい。E. Bowie はココナツ島から1959年頃来島したが、父はインドネシア、スラウェシ島のメナド付近の出身という。W. Cowley はダーンリー島生れで、少年時バドゥ島へ移り、1943年頃来島している。祖父はフィリピン人である。

19世紀の後半に、東南アジア（主としてフィリピン）、南太平洋の島々（メラネシア・ポリネシア）、ヨーロッパから真珠貝を求めて人々がトレス海峡諸島に来住する。これにキリスト教の布教活動が加わる。

すでに Haddon らの調査した時点でこの傾向はみられたが、それから80余年の間に島間の移動や混血がさらに進行し、新しい混血種としてのトレス海峡諸島民が形成されたといえる。

トレス海峡諸島の人口は、パプア・ニューギニアの独立以後に増加した島もあるが、一般に減少傾向がみられる。ハモンド島の村落は29家族だが、そのうち2家族は一家挙げて本土のウィーパ、マカイへ出稼ぎ中である。

家族員の中で島外に不定期的に職場をもつものが14人いるが、西オーストラリアの鉄鉱山や、ケープヨーク半島のウィーパのボーキサイト鉱山などへの出稼ぎが目立つ。また1964年～73年の間にオーストラリアのクリベイの真珠養殖場に出稼ぎに行った者は8人を数える。オーストラリア本土の経済開発との関連が密接で、島の人口は極めて流動的である。ケアンズなど本土の学校へ行く学生も8人ある。

人口は村長の所持する帳簿だと171人だが、出稼ぎや、本土の学校へ行く学生を除くと125人となっている（1975年8月調査）。

各島には教会、小学校、I. I. B（政府経営の商店）の支店、診療所があるが、ハモンド島ではカトリック教会のみで、他の施設は近隣の地域中心木曜島にある。ハモンド島は木曜島と海峡一つ隔てるだけで、小学校も木曜島の公立学校かミッションスクールに通学し、毎日通学船が出ている。

木曜島の港湾工事、ホーン島の空港拡張工事などに日傭いとして出る者、木曜島の役所や会社に勤める者もみられる。買物も木曜島の商店に出かけている。交通はディンギ（小型発動機船）または通学用船に便乗している。他島と異なり、地域中心的機能をもつ木曜島の近郊島としての性格をもっている。

VI. おわりに

トレス海峡諸島のハモンド島について、その自然的特色、村落と住居、家族構成な

どについて概要を報告したが、居住の歴史が古い他の島々に比べて、村落形成の歴史が新しく、寄合世帯の性格をもち、さらに地域中心木曜島の近郊島としての特色を示している。トレス海峡では木曜島の新村落タモイが、トレス海峡諸島からの移住者によって形成されており、また本土ケープヨーク半島に建設されたバマガもトレス海峡諸島からの移住者を計画的に集めている。

ハモンド島は宗教的要素が濃厚な村づくり、タモイとバマガは計画的な村づくりである。今後比較検討が必要である。第2次調査隊の報告によれば、トレス海峡のパプア・ニューギニア側の地域中心ダルーも、対岸パプア・ニューギニアからの移住者による村落形成がみられるので、将来、ダルー、木曜島（タモイ）、バマガ、ハモンドの比較検討も課題である。住居については第2次、第3次（予定）調査の資料集積をまって、整理してみたい。

謝 辞

トレス海峡島嶼民の地理学的・民族学的研究は、現在第2次調査を終り、資料の整理を進めながら、定期的に研究会を続けている。ハモンド島の調査は第1次調査隊全員によって行われたものである。隊長の藪内芳彦先生や大島襄二先生、島田正彦先生はじめ隊員諸氏には種々御教示を頂いている。厚く御礼申し上げる次第である。

文 献

- BECKETT, J. R.
1972 *The Torres Strait Islanders*. In D. Walker (ed.), *Bridge and Barrier: The Natural and Cultural History of Torres Strait*, Australian National University, pp. 307-326.
- DUNCAN, H.
1974 *Socio-Economic Conditions in the Torres Strait*, The Torres Strait Islanders Vol. I, Research School of Pacific Studies, Dept. of Economics, Australian National University, Canberra.
- HADDON, A. C. (ed.)
1901-1935 *Reports of Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits*, Vol. I-VI.
- 久原脩司
1977 「トレス海峡における真珠貝漁業と日本人の遺跡」『地理』22(5):74-84。
- LAABE, W.
1971 *Oral traditions and written documents on the history and ethnography of Northern Torres Strait Islands*, Wiesbaden, F. Steiner.
- LAWRIE, Margaret
1970 *Myths and Legends on Torres Strait*, University of Queensland Press.
- 松本博之
1977a 「マブィアグの村落と社会（I）——集落・人口・家族を中心に——」『大阪女子学園短期大学紀要1976』:121-143。
1977b 「マブィアグ島メモランダム」『地理』22(7):58-66。
1977c 「トレス海峡諸島の漁労文化——マブィアグ島を中心に——」『民族学研究』41(4):368-388。

杉本 ハモンド島（トレス海峡）の村落と住居

NIETSCHMANN, B.

1977 Torres Strait Islander Hunters and Environment. *Work-in-Progress Seminar by the Dept. of Human Geography*, Research School of Pacific Studies, Australian National University, Canberra, pp. 1-17.

大島襄二

1977a 「ヨーク島遊記」『地理』22(9):56-62。

1977b 「オーストラリア北西部における海岸アボリジニーズの漁労生活」『本位田重美先生定年記念論文集, 地域と文化』pp. 101-119。

島田正彦

1977 「ダーンリイ島の住民と生活」『地理』22(8):43-52。

杉本尚次

1977a 「ハモンド島と地域中心木曜島」『地理』22(6):58-65。

1977b 「木曜島——トレス海峡諸島の地域中心——」『地域文化』3:1-19。

SUMNER, R.

1974 *Settlers and Habitat in Tropical Queensland*. Monograph Series No. 6, Dept. of Geography, James Cook University of North Queensland.

WALKER, D. (ed.)

1972 *Bridge and Barrier, Natural and Cultural History of Torres Strait*, Research School of Pacific Studies, Dept. of Biogeography and Geomorphology, Australian National University, Canberra.

藪内芳彦

1977 「隊員と調査の島に——トレス海峡諸島調査記——」『地理』22(4):70-77。